

はは
「母」

1 枚目／世界で一番尊い人 (5枚目の絵の裏に貼る)

1976年(昭和51年)1月、第6回婦人部総会で池田先生は語りました。

「アメリカで、私が日本のある著名な財界人と懇談した時、『この世界で一番尊く偉いのは誰ですか』と聞かれた。おそらく、釈尊などの名前を、必ず挙げるものと、彼は予想していたようだ。だが、私は答えた。

『一番尊く偉いのは、一般市民のお母さんです!』

彼は、驚いた顔をした。私は続けた。母こそが、雨の日も風の日も、太陽のように変わることなく、わが友とわが家族を、慈愛を込めて守ってくれているからだ、と」

2 枚目／「母」の歌への思い (1枚目の絵の裏に貼る)

池田先生はこれまで、女性に対して数多くの詩や随筆などを執筆されてきました。

「母」の歌は、池田先生の長編詩「母」をもとに作られた歌です。池田先生は「母」の歌が誕生した当時の心境をこう語っています。

「長編詩『母』を歌にと考えたのも、けなげな庶民の母たちが、世界の人々の幸せと平和を祈り、日夜、献身的に行動しておられることへの感謝の思いからです」と。

先生は常に世界中の「母」にエールを送っているのです。

3 枚目／世界の音楽家に歌われる「母」の歌 (2枚目の絵の裏に貼る)

母を「還るべき大地」とうたいあげた曲の調べ。この母への讃歌は、時代を超え、文化の違いを超えて世界の人々に愛されています。

オーストリアの音楽家で文部次官を務めたサイフェルト女史は、1991年(平成3年)の本部幹部会で「母」の歌をドイツ語と日本語で熱唱しました。サイフェルト女史の母は、目が不自由でした。様々な困難にめげず、いつも朗らかだった母への思いがこもった歌声には、魂を揺さぶる響きがありました。

母の歌は、多くの音楽家や人々に歌われています。そして、母への感謝の思いを込めて響かせる歌声が、聴く人に感動を与えているのです。

4 枚目／「母」の歌がおくる励まし（3枚目の絵の裏に貼る）

1992年（平成4年）2月、池田先生はインドのソニア・ガンジー女史と会見しました。この時、先生は最愛の夫ラジブ・ガンジー首相を亡くしたばかりのソニア女史に「母」の歌が入ったオルゴールを贈りました。

「祖国と民衆のために命を捧げた首相のご一家が、不幸になるはずはない。断じて幸福になってもらいたい。「インドの母」として、太陽のごとく輝いてほしい」との思いからです。

その後、ソニア女史は夫の遺志を継ぎ「ラジブ・ガンジー財団」の総裁などを務めるなど、苦難を乗り越えていったのです。

その後も続く池田先生との交流のなかで、ソニア女史は「前にインドでくださったオルゴール。大好きで、毎日、聴いていました」と語っています。

5 枚目／女性の世紀（4枚目の絵の裏に貼る）

「母よ あなたの／思想と聡明さで 春を願う／地球の上に／平安の楽譜を 奏でてほしい／そのとき あなたは／人間世紀の母として 生きる」（「母」の歌より）

池田先生は、21世紀を「女性の世紀」「女性の時代」に、と一貫して主張してきました。池田先生は平和への女性の役割に期待し、綴っています。

『武力』や『権力』などのハード・パワーから、『文化』『教育』『平和』などのソフト・パワーへと、文明の基軸を大胆に変えることだ。そのためにも、21世紀文明は、生命を育み、護りゆく女性の智慧と慈愛を、中心的価値とすることである」と。

「母」のもつ知恵と慈愛が、21世紀に平和の春を告げているのです。

決意など